

小中学生における生成 AI 利用者の利用時留意点に基づく 類型化とその特性

Classification and Characteristics of Generative AI Users Among Elementary and Middle School Students Based on Usage Precautions

水野 一成 宮原 祐一
Kazunari Mizuno Yuuichi Miyahara

NTT ドコモ モバイル社会研究所
NTT DOCOMO Mobile Society Research Institute

＜あらまし＞ 2025 年 11 月に全国の小中学生を対象として実施した全国調査によると、生成 AI の利用率は小学校低学年で 2.7%、高学年で 18.8%、中学生では 40.4% となり、前年と比べて大幅な増加が確認された。生成 AI を利用している児童・生徒を対象に、利用時の留意事項に関する設問を用いて分析を行ったところ、因子分析の結果、「批判的情報処理」「情報モラル行動」の 2 因子が抽出された。これらの因子を参考に類型化を行った結果、「多面群」「批判的情報処理高群」「ルール重視群」「低留意群」の 4 類型に分類することができた。本稿では、これら各類型の特性について報告する。

＜キーワード＞ 生成 AI, 小学生, 中学生, 定量調査, ファクトチェック

1. 研究背景及び目的

近年、生成 AI は社会全体に急速に普及しており、とりわけ小中学生においてもその利用が拡大している。モバイル社会研究所が 2025 年に実施した全国調査では、中学生の生成 AI 利用率は 40.4%、前年から 27.1 ポイントも増加している。また小学校高学年の生成 AI 利用率は 18.8%、低学年は 2.7% とこちらも前年を上回っている。その主な用途は「調べもの」が中心であり、小中学生の情報収集行動に大きな変化をもたらしていることが示されている（図 1）。

一方で、生成 AI の急速な浸透に対し、児童・生徒の情報リテラシーや利用理解が十分に追いついていない状況も指摘されている。例えば、Pitfee が行った小中学生の生成 AI 利用に関する調査では、保護者の約 7 割が「AI の回答を鵜呑みにしている」と感じており、検索リテラシーに対する不安も高いことが明らかとなっている。

また、生成 AI 利用時に「個人情報を入力しない」などの基本的注意事項の認知は必ずしも十分ではなく、注意点の認知が半数に満た

ない項目も多い。東京都の調査においても、生成された情報をうのみにしない姿勢の醸成が重要であると指摘されている。

以上の背景を踏まえると、小中学生における生成 AI の利用は今後さらに拡大することが予想されるが、その適切な活用には、情報を批判的に評価する姿勢や安全な利用行動の習得が不可欠である。しかしながら、現状ではこれらの留意点に関する実態把握や体系的な分析は十分とは言えない。

そこで本研究では、小中学生における生成 AI 利用時の留意事項に着目し、その認知および行動の実態を明らかにすることを目的とする。

2. 調査概要

調査対象：2025 年 11 月

調査対象：全国，小中学生

調査方法：訪問留置法

標本抽出法：層化二段抽出法

性別・学年・地域・都市規模で割付

回答数：1,200 組（小中学生）

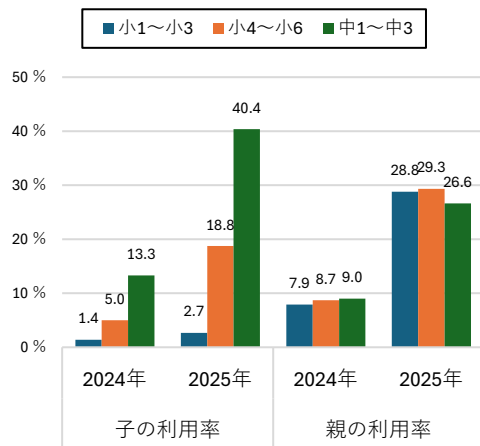


図1 生成AIの利用率

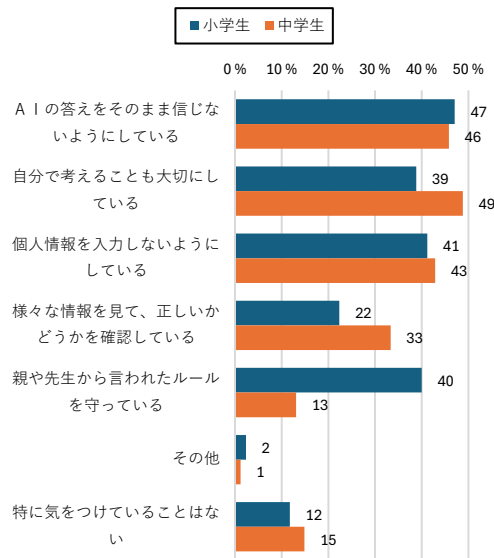


図2 生成AI利用時の留意事項

表1 生成AI利用時の留意事項
(因子分析)

	批判的 情報処理	情報モラ ル行動
いろいろな情報を見て、正しいかどうかを確認している	0.61	-0.10
自分で考えることも大切に行っている	0.60	-0.01
AIの答えをそのまま信じないようにしている	0.39	0.20
親や先生から言われたルールを守っている	-0.11	0.56
個人情報を入力しないようにしている	0.16	0.41

3. 分析結果（基礎集計）

3.1. 生成AIの利用時の留意事項

生成AIを利用している小中学生を対象に、生成AI利用時に留意している事項（複数回答）を調査した結果を図2に示す。小中学生いずれにおいても、「AIの答えをそのまま信じないようにしている」が約半数であった。また、中学生では「自分で考えることも大切に行っている」「個人情報を入力しないようにしている」がいずれも4割を超えていた。一方、小学生では「親や先生から言われたルールを守っている」が約4割であった。さらに、小中学生ともに1割強が「特に気をつけていることはない」と回答した。

3.2. 留意事項に基づく因子分析

次に、生成AI利用時に留意している事項の回答結果を基に因子分析（最尤法・プロマックス回転）を実施した。その結果、固有値1以上の基準により2因子が抽出され、「批判的情報処理」と「情報モラル行動」と命名した（表1）。

3.3. 留意事項に基づく類型化

表1の因子を参考に類型化を行った。類型化の方法としては、「批判的情報処理」に関連する項目（「いろいろな情報を見て正しいかどうかを確認している」「自分で考えることも大切に行っている」「AIの答えをそのまま信じないようにしている」のうちいずれか1項目以上に該当し、かつ「情報モラル行動」に関連する項目（「親や先生から言われたルールを守っている」「個人情報を入力しないようにしている」）のうちいずれか1項目以上に該当する群を「多面群」とした。

また、「批判的情報処理」のみ該当する群を「批判的情報処理高群」、「情報モラル行動」のみ該当する群を「ルール重視群」、いずれの項目にも該当しない群を「低留意群」とした。各群の構成比は表2に示す通りである。さらに、各群の属性をみると、「多面群」は女子、「批判

表2 生成AI利用時の留意事項類型化

	多面群	批判的情報 処理高群	ルール重 視群	低留意群	全体
批判的情報処理	○	○	×	×	
情報モラル行動	○	×	○	×	
回答数(人)	95	75	32	51	253
構成比(%)	38	30	13	20	
中学生比(%)	64	75	56	65	66
男子比(%)	37	44	44	55	43

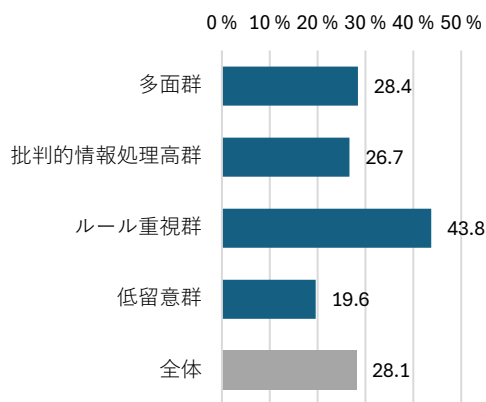


図3 生成AIを毎日利用する割合

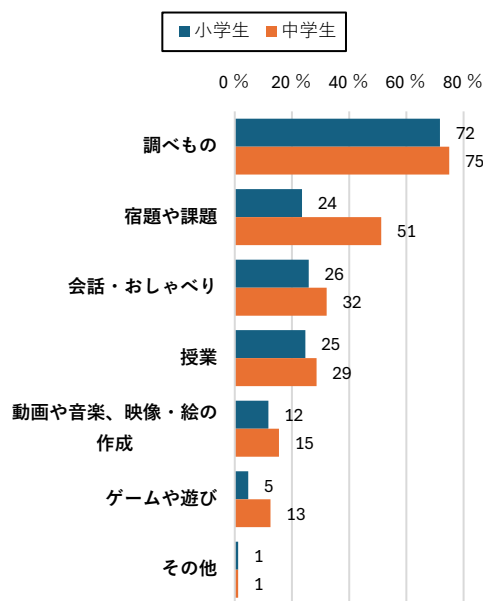


図4 生成AIの利用用途

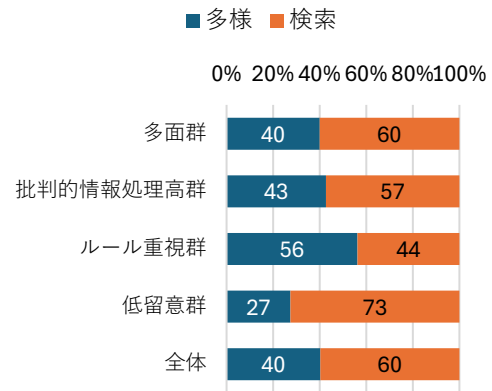


図5 生成AIの利用用途型

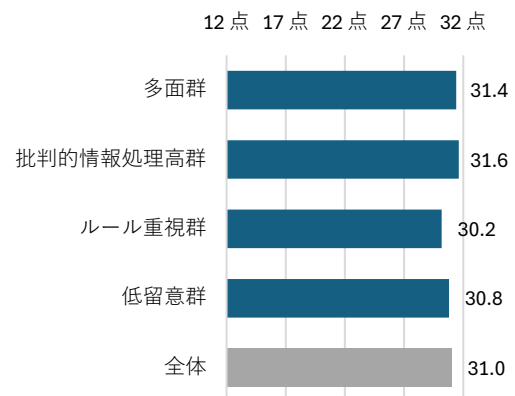


図6 情報活用実践力

「批判的情報処理高群」は中学生,「ルール重視群」は小学生,「低留意群」は男子に多い傾向がみられた。

4. 各群の特性

4.1. 利用頻度

ここからは,各群の特性を①生成AIの利用頻度,②生成AIの利用用途,③情報活用実践力の観点から検討する。

図3は,各群における生成AIを毎日利用している割合を示したものである。「ルール重視群」は他の群と比較して,毎日利用している割合が高い傾向がみられた。一方で,「低留意群」は毎日利用している割合が低い傾向を示した。

4.2. 生成AI利用用途

生成AIの利用用途に関する回答結果を基に,因子分析(最尤法,プロマックス回転)

表3 生成 AI 利用時の留意群と特性

	多面群	批判的情報 処理高群	ルール重 視群	低留意群
生成AI利用頻度			多い	少ない
生成AI利用用途			多様	検索
情報活用実践力	やや高い	やや高い	やや低い	
ネット利用時間 学習外(分)	166.9	151.3	154.7	168.7
ネット利用時間 学習(分)	63.2	53.2	36.1	31.4

を行い、「娯楽」と「探索」の2因子(固有値1以上)を抽出した。その結果を参考に、「ゲームや遊び」「動画・音楽・映像の作成」「会話」のいずれかにおいて生成AIを利用している者を「多面群」とし、これらの用途は利用していないものの、「宿題や課題」「学校の授業」または「調べもの」において生成AIを利用している者を「検索」とした。これらの利用用途類型と、生成AI利用時の留意に関する類型を組み合わせ分析した結果を図5に示す。「ルール重視群」は多方面にわたる利用が多くみられた一方、「低留意群」は検索型の利用が多い傾向がみられた。

4.3. 情報活用実践力

留意事項の類型群と情報活用実践力との関係について検討した結果を図6に示す。情報活用実践力の測定には、高比良らが作成した「情報活用の実践力」尺度を用いた。本研究では、同尺度に含まれる下位概念である①収集力、②判断力、③表現力、④処理力、⑤創造力、⑥発信・伝達力について、各概念からそれぞれ2項目ずつを抜粋し、4件法により測定した。得られた回答は得点化し、合計得点(12点～48点)として分析に用いた。その結果、「ルール重視群」は相対的に得点が低く、一方で「批判的情報処理高群」および「多面群」は相対的に得点が高い傾向がみられた。

5. まとめ(結論)

小中学生における生成AIの利用時の留意事項に基づき類型化を行った結果、「批判的情報処理」と「情報モラル行動」の両方を行っている群、一方のみを行っている群、いずれも行っていない群に分類された。各群の特性は表3

に示す通りである。

まず、「批判的情報処理」を行っている群では、情報活用実践力がやや高く、日常のインターネット利用においても学習目的での利用時間が長い傾向であった。一方で、「情報モラル行動」のみが高い群では、生成AIの利用頻度が高く、利用用途も多様であったが、情報活用実践力は相対的に低い傾向がみられた。

これらの結果から、成長に伴い親や教師から与えられたルールへの依存が弱まった場合においても、「批判的情報処理」の力を備えているかが、適切な生成AI利用を継続する上で重要な要素となる可能性が示唆される。

また、「批判的情報処理」「情報モラル行動」のいずれも行っていない群では、検索中心の利用が多い。このことから、他者との比較や情報の信頼性の検証といった「批判的情報処理」の育成が重要な課題であると考えられる。

参考文献

- NTTドコモ モバイル社会研究所(2026) 生成AIの利用率
<https://www.mobaken.jp/project/lifestyle/20260406.html> (参照日 2026.06.10)
- 高比良美詠子,坂元章,森津太子(2001)情報活用の実践力尺度の作成と信頼性および妥当性の検討. 日本教育工学会 24(4), 247-256
- 東京都(2026) 令和7年度「都民のAIに関する意識調査」結果の公表
<https://www.metro.tokyo.lg.jp/information/press/2026/02/2026021706>(参照日 2026.06.10)
- Piftee (2026) 小中学生の生成AI利用と調べ方,<https://news.mynavi.jp/article/20260430-4398896/> (参照日 2026.06.10)
- ベネッセコーポレーション(2026) 生成AIの利用に関する意識
<https://prt看times.jp/main/html/rd/p/000001417.0000000120.html> (参照日 2026.06.10)
- 水野一成,近藤勢津子(2026) 中学生における生成AI利用の用途別類型化とその特性. 日本教育工学会研究報告集 2026 巻1号, 284-287